

# 「も」の意味機能－「も」のスコープとフォーカス－

伊藤健人

## The function of Jananese particle MO on the semantic level – the scope and focus of MO –

Taketo Ito

This paper discusses the scope and focus of Jananese particle MO called 'TORITATEJYOSHI' and the functions of the particle on the semantic level. It has been said that MO has some gramatical functions called 'TORITATE'. The usage of MO is mainly classified into 3types: (1) Also; Too 'DOURUI/RUIKA', (2) Even 'IGAI/KYOUTYOU', (3) Exclamation; Admiration 'YAWARAGE/EITAN'. In Ito, it has been pointed out that those usage must not be discussed on the same level and proposed that (1) should be dealt with on the Semantic level and (2), (3) on Pragmatic level. In this proposal, the study of the scope and focus plays very important roles. I will demonstrate the regulations of the scope and focus that MO indicates. This paper argues that (a) the scope equals to its Proposition and is immovable, (b) the focus varies in 3types depending on the relations of Proposition attached with MO and another Proposition such as (i) NP focus, (ii) VP focus, (iii) P (=Proposition) focus.

【キーワード】 「も」のスコープとフォーカス、命題間の範列的關係、関連化

### 0. はじめに

本稿は、「も」の意味機能、及び、「も」のスコープ・フォーカスを考察するものである。

日本語助詞（取り立て助詞／取り立て詞）の「も」には、①“同類／累加”（eg. 「太郎はリンゴも買った。」）、②“意外／強調”（eg. 「こんな簡単な問題もわからない。」）、③“柔らげ／詠嘆”（eg. 「秋も深まって来ましたね。」）などと呼ばれる三つの用法があるとされ、一応の共通理解となっている。伊藤（1996）は、

## 言語科学研究第3号(1997年)

「も」はそれ自体の持つ“意味”を表すのみならず、意味的レベル、及び、語用的レベルにまたがるいくつかの機能を持つものであるという観点から、この“同類／累加”、“意外／強調”、“柔らげ／詠嘆”という3分類が「も」の“意味”の区別を示していると考えられていることの問題点を指摘した。そして、「も」の機能は、意味的レベル、及び、語用的レベルにまたがるものであるという立場から、「も」の機能を意味的・語用的両レベルに分けて考察した<sup>注1</sup>。

伊藤(1996)では、一般に「も」の表す“意味”の一つとされている、いわゆる“意外／強調”と、“柔らげ／詠嘆”などと呼ばれる用法は、意味的レベルのものではなく、語用的レベルのものと考え、それぞれ、「意外」と「表出」という語用効果を表すと分析している。「意外」とは、“話し手は「も」の付加した命題の表す事態が実現する可能性を低いと予想したのに、実際はその予想に反して事態が実現した”ということを示す語用効果であり、「表出」とは、“話し手が「も」の付加した命題の表す事態について主観的・感情的評価を与えた”ということを示す語用効果である<sup>注2</sup>。

また、一見問題が少ないように思われる“同類／累加”についても、一般的な“あるものを取り立てて、他と同類であることを表す”という記述には、“あるもの”と“他”がそれぞれどんな要素であるかが曖昧であるという問題点を指摘している。さらに伊藤(1996)は、“同類／累加”の「も」は、意味素性として<累加>を表し、意味的レベルにおいて「関連化」という意味機能を持つと考え、この関連化という意味機能には、「も」の付加した命題と範列的('paradigmatic')な関係にある命題が想定できるか否かによって、二つのタイプが認められると分析している<sup>注3</sup>。

本稿では、「も」の付加した命題と範列的な関係にある命題が想定できる場合の「も」の意味機能である「関連化」の類型とそれぞれの類型に応じた「も」のスコープ・フォーカスについて述べる。

## 1. いわゆる“同類／累加”の「も」について

いわゆる“同類／累加”の「も」の意味については、松下(1930)、山田(1936)、高橋(1978)など従来の記述から“あるものを取り立てて、他と同類であることを表す”という一般的な記述が抽出できる。しかし、この記述は“あるもの”と

「も」の意味機能 — 「も」のスコープとフォーカス —

“他”がそれぞれどんな要素であるかが曖昧であるという問題点がある。例えば、(1a,b)は、どちらも、「“飲み物”を飲む」という構造を持つものである。従って、“あるもの”と“他”がそれぞれ“飲み物”である“同類／累加”の例と考えられる。

(1) a 大変暑かったので、太郎はジュースを飲み、ビールも飲んだ。

b\* 大変暑かったので、太郎はジュースを飲み、甘酒も飲んだ。

(1a)の“あるもの”は「ビール」、「他」は「ジュース」と考えられ、両者には“飲み物”という意味的な共通性が認められる。(1b)も同様に“あるもの”は「甘酒」、「他」は「ジュース」のように両者に“飲み物”という意味的な共通性が認められるが、不適格な文である。これは、“大変暑い”という状況において、(1a)では、「ジュースを飲む」という事態に加えて「ビールを飲む」という事態が関連付けられているが、(1b)では、「ジュースを飲む」という事態に加えて、「甘酒を飲む」という事態が関連付けられないからであると考えられる。

また、次の(2a,b)でも同様のことが言える。

(2) a 大変暑かったので、太郎はジュースを飲み、プールにも行った。

b\* 大変暑かったので、太郎はジュースを飲み、魚屋にも行った。

(1a,b)と(2a,b)の比較から、ある文に「も」を付加するということは、話し手が背景となるある事態に「も」の付加した当該の事態を関連付けようとするためであると考えられる。「も」の“同類／累加”は、表面的な個々の要素間の対立ではなく、それらの要素を統括する事態間の対立と考える方が統一的であると言える。

これらのことを踏まえて、以下では、伊藤(1996)で提案した「も」の意味機能である「関連化」について述べる。

## 2. 「も」の意味機能—関連化—

伊藤(1996)では、いわゆる“同類／累加”の「も」は、意味素性として<累加>を表し、意味的レベルにおいて「関連化」という意味機能を持つと分析している。

(3) 「も」の意味機能：命題との関連化

→「も」の付加した命題と範列的（‘paradigmatic’）な関係にある他の命題との関連化

「も」の<累加>という意味素性は、「関連化」という意味機能により、当該の

## 言語科学研究第3号(1997年)

文において具現化されるものである。これは、「も」の<累加>という意味素性は、どんな文にでも表されるものではなく、「関連化」という意味機能が働かない場合は、<累加>という意味素性は表されず、当該の文の適格性は保証されないということである。上で見た(1a,b)の適格性の差は、「大変暑い」という状況において、(1a)では、「ジュースを飲む」という事態に加えて、「ビールを飲む」という事態が関連付けられ、<累加>が具現化されているが、(1b)は、「甘酒を飲む」が関連付けられないので、<累加>が具現化されないところにあると考えられる。

さて、(3)で提示した本稿で「命題」と呼ぶ概念は、様々な用語で表されるものである。例えば、寺村(1991)は、本稿の命題に相当する概念を「コト的意味」としている。寺村の「コト的意味」とは、「述語用言の表す動作、でき事、状態とそれに関係するもの、人、事が結びついて作りあげる事実関係的意味」と定義されている(寺村,1991:p.7)。また、益岡(1991)は、日本語の文は、「命題」と「モダリティ」という二大要素により構成されているとし、「命題」を「客観的な事柄を表す要素」、「モダリティ」を「主体的な判断・態度を表す要素」と規定している(益岡,1991:p.6)。

本稿では、命題を、ある文の客観的・基本的な叙述内容をになう要素と規定する。命題という概念を認めるとして、どの階層までを命題を構成する要素とするかをより詳細に定めるために、ある文の命題を構成する階層は、否定層は含むが、時制層は含まないという規定も同時に示すこととする。これを命題の規定として(4)に示す。

## (4) 命題の規定

→ ある文における客観的・基本的な叙述内容をになう要素：否定辞層は含むが時制辞層は含まない

(4)で、否定辞層を命題に含む理由は、(5)のような例における「も」の意味機能は、否定辞層までを命題と考えなければ説明できないからである。

(5) 今日一日、入浴を控えて下さい。それから、お酒も飲まないように。

(5) a [否定辞層 [接尾辞層 [述語句 (人が) 入浴を控える]]] φ

⇕ 範列的な関係がある

[否定辞層 [接尾辞層 [述語句 (人が) お酒を飲む]] ない

b [接尾辞層 [述語句 (人が) 入浴を控える]]

「も」の意味機能 — 「も」のスコープとフォーカス —

⇕ 範列的な関係がない

[接尾辞層 [述語句 (人が) お酒を飲む] ]

(5)は、否定辞層までを命題と考えれば、(5'a)のように [入浴を控える] と [お酒を飲まない] がともに“医師からの指示”などの共通性を持つと考えられる。しかし、否定辞層を命題と考えなければ、(5'b)のように両者に意味的共通性はなく、従って、(5)の適格性が説明できない。このような事実から、命題には少なくとも否定辞層は含まれると考えられる。では、否定辞層の外側の時制辞層は含まれるだろうか。

(6)医者に止められたので、昨日は入浴を控えた。今日は酒も飲まない。  
時制辞層が命題に含まれるとすれば、(6)の命題は、(6'a)のように考えられる。また、時制辞層が命題に含まれないとすれば、(6'b)のように考えられる。

(6') a [時制辞層昨日 [否定辞層 [接尾辞層 [述語句 (人が) 入浴を控る] ] ] た]

⇕ 範列的な関係がある

[時制辞層今日 [否定辞層 [接尾辞層 [述語句 (人が) 酒を飲む] ] ] ない]  $\phi$

b [否定辞層 [接尾辞層 [述語句 (人が) 入浴を控える] ] ]

⇕ 範列的な関係がある

[否定辞層 [接尾辞層 [述語句 (人が) 酒を飲む] ] ] ない]

(6'a,b)の比較から、時制辞層を命題に含めた場合と含めない場合のどちらの場合も意味的な共通性を持つと言える。つまり、命題に時制辞層が含まれなくても意味解釈の妨げになる可能性は少ない。言い換えると、時制辞層は命題の構成に積極的に関わっていないと考えられる。以上の考察から、本稿で命題と呼ぶ概念は、否定辞層までの要素によって構成されるものとする。

さて、(3)に示した「も」の意味機能は、「も」の付加した命題と範列的 ('paradigmatic') な関係にある他の命題との関連化を表すものであるが、命題間の範列的關係は、常に一通りであるというわけではない。伊藤 (1996) では、命題間の範列的關係には3つの類型があることを指摘している。「も」の意味機能は、「も」が当該の文の客観的・基本的な叙述内容である命題をスコープとし、それと範列的關係にある命題とを関連付けるということである。この「命題との関連化」は、「も」のスコープの範囲内の、フォーカスとなる要素によって実際的に示される。以下、節を改めて、範列的 ('paradigmatic') 関係と「も」のスコープ・フォー

## 言語科学研究第3号(1997年)

カスについて述べる。

### 3. 命題間の範列的 ('paradigmatic') 関係

ここでは、(3)に挙げた「も」の意味機能は、「も」が当該の文の客観的・基本的な叙述内容である命題をスコープとし、それと範列的關係にある命題とを関連付けるものであることを述べる。この「命題との関連化」は、「も」のスコープの範囲内の、フォーカスとなる要素によって、实际的に示される。まず、3.1.で以下の議論の基盤となる「も」のスコープとフォーカスについて述べたい。

#### 3.1. 「も」のスコープとフォーカス

「も」或いは、「も」を含めた取り立て助詞の「スコープ」、「フォーカス」については、既に多くの有益な先行研究がなされているが、それらの先行研究は、「も」の意味作用が直接的に働く領域(範囲)のみをスコープとするか否かという点において二つに大分される。

「スコープ＝「も」の意味作用が实际的に働く領域(範囲)」とする沼田(1986)、山中(1990)などの分析では、スコープが意味解釈に直接関与するものとなり、スコープは一定の範囲にとどまらず、意味解釈に応じて、NPやVPなど移動するものとなる。

これに対して、スコープを「も」の意味作用が働く最大の領域(範囲)と捉え、「も」の意味作用が直接的に働く領域(範囲)とはしない、益岡(1991)、沼田・徐(1995)に代表される分析では、スコープは、ある命題とそれに関わる別の命題の関係を問題にするもので、命題間の範列的('paradigmatic')な関係を表すものとされる。この捉え方においては、スコープは常に一定の範囲(＝当該の文の命題)であり、意味解釈に応じて移動するものではない。

本稿は、この二つの捉え方の内、益岡(1991)、沼田・徐(1995)に代表される後者の捉え方を採用する。それは、本稿では、「も」は、「も」の付加した命題と範列的關係にある他の命題との関連化という意味機能を持つと考えるからである。筆者は、「も」の“スコープ”を、「も」の意味機能が及ぶ最大の範囲として捉え、「も」の意味機能はスコープ内の要素にのみ及び、その範囲は、命題を越えることはないと規定する。そして、実際には、フォーカスとなる要素によって範列的關係が具体的に表されると考える。本稿の「も」のスコープ・フォーカスの規定を(7)

「も」の意味機能 — 「も」のスコープとフォーカス —

(8)に示す。

(7) 「も」のスコープの規定

→ 「も」の意味機能の及ぶ最大の範囲 (= 「命題」)

・ 「も」の意味機能は、スコープ内の要素にのみ及ぶ

(8) 「も」のフォーカスの規定

→ 「も」の意味機能が实际的に働くスコープ内の要素

「も」の意味機能はスコープ、即ち、当該の文の命題と他の要素との関係を背景として、そのスコープ内のフォーカスとなる要素により实际的に働くと考えられる。

この規定に従えば、(9)～(11)のスコープとフォーカスは、(9')～(11')となる( [ ] はスコープ、< > はフォーカスを示す)。

(9) 昼ごろから雨が降っていた。午後には雪も降っていた。

(9') [<雪が>降る]

(10) 試験に備えて、太郎は、ノートをまとめ、問題集も解いた。

(10') [太郎が<問題集を解く>]

(11) 娘の縁談が決まり、大口の注文も入ったので、寿司をとった。

(11') [<大口の注文が入る>]

(9)～(11')に示したように、「も」のフォーカスは、(9')は<雪が>というNPであり、(10')は<問題集を解く>というVPであり、(11')<大口の注文が入る>といういわゆる文の形式を備えた命題であると考えられる。

このように、「も」のフォーカスは意味解釈に応じてその範囲が異なるものであるが、これには、3タイプが考えられる。「も」のフォーカスには、スコープとなる当該の文の命題とそれと対照される要素との関係によって、(12)に示す①～③の3タイプが考えられる。

(12) 「も」のフォーカスの3タイプ

① NPフォーカス

→ 「も」の付加した名詞句をフォーカスとする ((9)に相当)

② VPフォーカス

→ 「も」の付加した名詞句を含む述語句をフォーカスとする

((10)に相当)

③ Pフォーカス

## 言語科学研究第3号(1997年)

→「も」の付加した命題全体をフォーカスとする ((11)に相当)

①のNPフォーカスとは、「も」の付加した名詞句をフォーカスとするものであり、上の(9)では<雪が>というNPにあたる。

②のVPフォーカスとは、「も」の付加した名詞句を含む述語句をフォーカスとするものであり、上の(10)では<問題集を解く>というVPにあたる。

③のPフォーカスとは、「も」を含む命題全体をフォーカスとするものであり、Pは‘proposition’ (=命題) の略である。(11)では<大口の注文が入る>という命題、即ち、スコープの範囲すべてとなる。

以上のような「も」のフォーカスの3タイプは、「も」の付加した当該の命題と他命題との範列的な関係の種類と密接な関係を持つ。これについて、節を改めて述べる。

### 3.2. 命題間の範列的(‘paradigmatic’) 関係

ここでは、命題間の範列的關係には、3つの類型があり、それらは、「も」のフォーカスの3タイプと密接な関係にあることを述べる。

1.で見たように、「も」は範列的(‘paradigmatic’)な他の命題との関連化という意味機能を持つものである。この命題間の範列的關係には、3つの類型が考えられる。

#### (13) 命題間の範列的(‘paradigmatic’) 関係① ② ③

##### ①：同述語命題・NPフォーカス

→「も」が付加した命題と、それと対照される命題が同じ述語を持ち、それぞれのNP以外は同構造である

##### ②：異述語命題・VPフォーカス

→「も」が付加した命題と、それと対照される命題では、それぞれ異なった述語を持つが、それぞれの命題に社会的・一般的知識に基づく共通性がある

##### ③：異述語命題・Pフォーカス

→「も」が付加した命題と、それと対照される命題では、それぞれ異なった述語を持ち、また、それぞれの命題に社会的・一般的知識に基づく共通性もない



「も」の意味機能 — 「も」のスコープとフォーカス —

(13)に示した命題間の範列的關係①②③において、「も」の意味機能がどのように働くかを例を挙げながら見ていく。

まず、命題間の範列的關係①:同述語命題・NPフォーカスは、「も」が付加した命題とそれと対照される命題が同じ述語を持ち、それぞれのNP以外は同構造である命題間の関係である。これを(14)と両命題の範列的關係を図示した(14')で見てみよう ([ ]はスコープ、< >はフォーカスを表す)。

(14) 昼ごろから雨が降っていた。午後には雪も降っていた。

(14) 範列的關係：[<雪が<sub>NP</sub>>降る]

⇕...範列的關係①：(「～が降る」)

[<雨が>降る]

(14)は、それぞれ「～が降る」という同じ構造を持つ、「雪が降る」という命題と「雨が降る」という命題が範列的關係にあると考えられる。「も」のフォーカスは、NPフォーカスで、両命題がともに「降る」という同じ述語を持ち、「雪が」と「雨が」の違いにより異なった事態を表しているが、「雪が降る」という命題に「も」が付加されたことにより、関連化という意味機能が働き、“雪以外の何か降った”という事態に“雪が降った”という事態が累加されることが表される。このように、「も」が付加した命題と、それと対照される命題が同じ述語を持ち、それぞれのNP以外は同構造である、命題間の範列的關係①の場合、「も」の意味機能である関連化は、フォーカスとなるNPと、範列的關係にある他の命題のNPとの間に具体化され、NPへの<累加>が表される。

次に、命題間の範列的關係②:異述語命題・VPフォーカスについて述べる。命題間の範列的關係②は、「も」が付加した命題と、それと対照される命題では、それぞれ異なった述語を持つが、それぞれの命題に社会的・一般的知識に基づく共通性があるものである。(15)を見てみよう。(15)の「電話をかける」と「手紙を書く」というVPは、“連絡をとる”という意味において社会的・一般的知識に基づいた共通性が認められるものである。( [ ]はスコープ、< >はフォーカスを示す)。

(15) 私は、花子に手紙を書き電話もかけたが、全く連絡がとれない。

(15) 「私が花子に<電話をかける<sub>VP</sub>>]

⇕...範列的關係②：社会的、一般的知識 = “連絡をとる”

言語科学研究第3号(1997年)

[私が花子に<手紙を書く>]

(15)の「電話もかけた」は、範列的關係①とは違い、「～をかける」という構造における、「～を」の部分に他の要素が入った「上着をかける」「命をかける」などの他のNPと対照されるNPフォーカスとは考えられない。(15)は、「電話をかける」というVPが「手紙を書く」というVPと対照されると考えられる。これは、(15)の「電話を」というNPと「かける」という動詞が意味的に強い結び付きを持っており、「電話をかける」という一つのVPとして意味を担っているからであると考えられる。このことから、「も」が付加した命題である[私が花子に電話をかける]における「も」のフォーカスの「電話をかける」というVPが範列的關係にある[私が花子に手紙を書く]という命題における「手紙を書く」というVPに累加されると考えられる。また、下の(16)も同様に、「も」が付加した命題と、それと対照される命題では述語が異なるが、両命題に社会的・一般的知識に基づく共通性が認められる範列的關係②の例である（[ ]はスコープ、< >はフォーカスを示す）。

(16) その地震は、震度が7で、縦揺れも激しかったと報道されている。

(PC:井上,1995)

(16') [その地震が<縦揺れが激しい<sub>VP</sub>>]

⇕...範列的關係②：社会的、一般的知識＝“大地震”

[その地震が<震度が7だ>]

(16)は、(16')に図示したように、VPフォーカスであり、両命題は、[その地震が縦揺れが激しい]、[その地震が震度が7だ]のように異なったVPを持つものであるが、社会的・一般的知識による“大地震”という意味で両者に共通性が認められる。

このように、命題間の範列的關係②は、「も」の付加した命題とそれと対照される命題とが異なる述語の命題であるが、両命題に社会的・一般的知識に基づく関連性が認められるものである。そして、この命題間の範列的關係②になる命題の特徴としては、益岡(1991)でも指摘されているように、「も」が後接するNPと述語との意味的結び付きが強いということが挙げられる<sup>注4</sup>。

最後に、命題間の範列的關係③: 異述語命題・Pフォーカスについて述べる。命題間の範列的關係③は、命題間の範列的關係②と同様、「も」付加した命題と、

「も」の意味機能 - 「も」のスコープとフォーカス -

それと対照される命題がそれぞれ異なった述語を持つものである。しかし、命題間に社会的、一般的知識に基づく共通性が認められないという点において命題間の範列的關係②とは区別されるものである。それぞれの述語が異なり、両命題に社会的、一般的知識に基づく共通性が認められないにも関わらず、このタイプの文の適格性が保たれるのはなぜであろうか。(17)を見てみよう。

(17) 娘の縁談が決まり、大口の注文も入ったので、寿司をとった。

(15)の「大口の注文も入った」は、範列的關係①のように、「～が入った」の「～が」の部分に他の要素が入った他の事態と対照されているとは考えられない。また、「娘の縁談が決まる」という命題が表す事態と「大口の注文が入る」という命題が表す事態には、社会的、一般的知識に基づく共通性が認められないため、範列的關係②にも該当しない。しかし、(17)は適格な文である。本稿は、(17)のような文においては、「も」の意味機能である関連化は、両命題に共通する話し手の評価が要因となって働いていると考える。これを(17)に図示する（[ ]はスコープ、< >はフォーカスを示す）。

(17) [ <大口の注文が入る<sub>p</sub>> ]

⇕...範列的關係③：話し手の評価＝“めでたい”

[ <娘の縁談が決まる> ]

(17)は、(17)に図示したように、「も」が付加した[大口の注文が入る]という命題と[娘の縁談が決まる]という命題が対照されると考えられる。この二つの命題には、社会的・一般的知識に基づく共通点は、通常は、認められないものと言える。しかし、話し手が両命題に、例えば“めでたい”という共通した評価を認め、[大口の注文が入る]という命題に「も」を付加することにより、両命題に関連化という意味機能が働き、<累加>という意味素性が具体化されると考えられる。この命題間の関係が範列的關係③である場合、「も」のフォーカスは、命題全体を取り立てるPフォーカスと考えられる。範列的關係③は、「も」の意味機能である関連化がフォーカスである命題全体に及ぶものであり、(17)では、[娘の縁談が決まる]という命題が表す事態に、[大口の注文が入る]という命題の表す事態が累加されているのである。下の(18)(19)も範列的關係③の例である。

(18) 来週は研究発表がある。結婚式のスピーチもしなくちゃならない。

(19) A: 旅行はどうでしたか。

言語科学研究第3号(1997年)

B:それが、美術館は改築中で、腰も痛かったので…。

(18)は〔(私が)結婚式のスピーチをする〕という命題と、〔研究発表がある〕という命題に、話し手が“忙しい”という共通の評価を認めたと考えることができる。また、(19)は〔(私が)腰が痛い〕という命題と〔美術館が改築中だ〕という命題に、話し手が“旅行には好ましくない”という共通の評価を認めたと考えることができる。(18')(19')は、(18)(19)の範列的關係を図示したものである

(18) 〔<(私が)結婚式のスピーチをする<sub>p</sub>>〕

⇕…範列的關係③：話し手の評価=“忙しい”

〔<研究発表がある>〕

(19) 〔<(私が)腰が痛い<sub>p</sub>>〕

⇕…範列的關係③：話し手の評価=“旅行には好ましくない”

〔<美術館が改築中だ>〕

さて、「も」がVPよりも広い範囲を取り立てる場合について、沼田(1986)の「後方移動スコープ」や、山中(1990)の「『も』のスコープ・レベル3」は、文を取り立てるとしている。しかし、VPよりも広い範囲を文とすれば、副詞や、「ね」「よ」などの終助詞、「さ」などの間投助詞までも含むことになってしまう。しかし、これらの要素は、任意のものである。従って、(17)～(19)における<累加>という意味は、「も」を含む当該の文と他の文との間においてではなく、「も」の付加された命題と範列的關係にある他の命題との間において表されるものである。以上から、本稿では、「も」のフォーカスとなる、VPよりも広い範囲は命題であると考え、その命題がフォーカスとなるものをPフォーカスとする。

しかし、VPフォーカスとPフォーカスは、形態的には同じ要素を範囲とする場合がある。例えば、(20)(21)の「も」のフォーカスは、(20)はVPフォーカス、(21)はPフォーカスと考えられるが、形態的にはどちらも<雪が降りだす>となる。

(20) 昼ごろから急に寒くなった。午後からは雪も降りだした。

(21) 仕事がやっと片付いた。午後からは雪も降りだした。明日こそは、夢にまで見たスキーができるだろう。

(20)の「も」のフォーカスは、VPフォーカスであると考えられる。これは、〔雪が降りだす〕という命題が表す事態と、〔寒くなる〕という命題が表す事態に、社会的、一般的知識に基づく“悪天候”という共通性が認められるからである。従っ

「も」の意味機能 — 「も」のスコープとフォーカス —

て、両命題の関係は、範列的關係②と考えられ、＜累加＞の具体化が、「も」のフォーカスである＜雪が降りだす＞と、範列的關係にある＜寒くなる＞という要素とによって表されている。これは(20')のように図示できる。

(20) [＜雪が降りだす<sub>VP</sub>＞]

⇕...範列的關係②：社会的、一般的知識＝“悪天候”

[＜寒くなる＞]

これに対し、(21)における「も」のフォーカスは、Pフォーカスであると考えられる。これは、[雪が降りだす]という命題が表す事態と、[仕事が片付く]という命題が表す事態には、社会的、一般的知識に基づく共通性が認められないが、話し手が両事態に“スキーができる好条件”などという共通の評価を認めていると考えられるからである。従って、両命題の関係は、範列的關係③と考えられ、＜累加＞の具体化が、「も」のフォーカスである＜雪が降りだす＞と、範列的關係にある＜仕事が片付く＞という要素とによって表されている。これを図示すると(21)のようになる。

(21) [＜雪が降りだす<sub>P</sub>＞]

⇕...範列的關係③：話し手の評価＝“スキーができる好条件”

[＜仕事が片付く＞]

このように、VPフォーカスが、VPの持つ社会的、一般的知識に基づく意味から離れられず、“直接的”な意味しか表せないのに対し、Pフォーカスは、命題が表し得る事態から類推される、“間接的”な意味を問題とする点で、両者を区別して考える必要があると言える。つまり、同じ要素が「も」のフォーカスであっても、VPフォーカスとPフォーカスでは、問題となる意味の側面が異なるのである。従って例えば、次の(22)(23)の「昼ごろから急に寒くなった。」「午後には雪も降りだした。」という二文における命題間の範列的關係は、通常は、範列的關係②であると解釈されるが、文脈(状況)によっては、範列的關係③にもなり得る[ ]はスコープ、< >はフォーカスを示す)。

(22=20) 昼ごろから急に寒くなった。午後からは雪も降りだした。

(22'=20') [＜雪が降りだす<sub>VP</sub>＞]

⇕...範列的關係②：社会的、一般的知識＝“悪天候”

[＜寒くなる＞]

## 言語科学研究第3号(1997年)

(23=21) 昼ごろから急に寒くなった。午後には雪も降りだした。今年は雪が少なく困っていたが、明日こそは、夢にまで見たスキーができるだろう。

(23'=21') [ $\langle$ 雪が降りだす $\rangle_p$ ]

⇕...範列的關係③：話し手の評価=“スキーができる好条件”

[ $\langle$ 寒くなる $\rangle$ ]

以上、本節では範列的關係にある命題が想定できる場合の「も」の意味機能、即ち、関連化の2タイプについて筆者の分析を述べた。

#### 4. おわりに

ここでは、本稿での考察をまとめる。「も」は意味レベルにおいて、「も」のスコープとなる命題と範列的關係にある他の命題との「関連化」という意味機能を持ち、これによって、 $\langle$ 累加 $\rangle$ という意味素性が具現化される。「も」は、意味機能として、範列的關係にある命題との関連化を持つが、命題間の範列的關係は、常に一通りであるというわけではない。命題間の範列的關係のあり方は、「も」の3タイプのフォーカス (NP/VP/P) と対応するものであり3つの類型が認められる。

#### 【注記】

- 1: 伊藤 (1996)では、「意味的レベル」を「一単語 (或いは一文) が、文脈などからの情報や、音声的卓立、モダリティ要素の付加などに関わらず、常に担っている意味素性 (或いは伝達内容) を問題とするもので、聞き手に対する話し手の心理的態度などは問題としないものである」と規定し、「語用的レベル」を、「意味的レベルでのいわゆる“意味”を踏まえ、文脈などからの情報や、音声的卓立、モダリティ要素の付加などを考慮し、主に、聞き手に対する話し手の心理的態度を問題とするものである」と規定した。そして、意味的レベル、及び、語用的レベルでのいわゆる“意味”を「意味素性」と「語用効果」とに区別し、「意味素性」と「語用効果」を具現化する、意味的レベルの「意味機能」と、語用的レベルの「語用機能」を、「も」の取り立て機能として考察した。
- 2:  $\langle$ 意外 $\rangle$ は、命題内における「も」のフォーカスとなる要素と他の要素との統合的 ('syntagmatic') な関係において、フォーカスとなる要素が通常は想定されないものであることを示すという語用機能が働いた場合に当該の文に表現される語用効果である。 $\langle$ 表出 $\rangle$ は、「も」の意味機能である関連化が働かないようにするという語用機能が働いた場合に当該の文に表現される語用効果であるが、 $\langle$ 表出 $\rangle$ が表されるには、上の語用

「も」の意味機能 — 「も」のスコープとフォーカス —

機能が働くことに加え、いくつかの条件が必要と考えられる。伊藤 (1996) では、それらの諸条件を仮説として提出した。

- 3: 伊藤 (1996) では、「も」の意味機能である、関連化に、「範列的 ('paradigmatic') 関係にある命題」との関連化と、「時の経過という通念」との関連化の2種を提案している。
- 4: 益岡 (1991) は、NP (益岡 (1991) の言う「補足語」) と述語との意味的結び付きの強さについては、NPと述語の結合の慣習性と、NPの「意味役割」の二つの問題を考えなければならないと述べている。

【参考文献】

- 伊藤 健人 (1996) 『「も」の取り立て機能—意味的レベルと語用的レベルの考察—』神田外語大学大学院修士論文
- 高橋 太郎 (1978) 「「も」によるとりたて形の記述的研究」『国立国語研究所報告62研究報告集(1)』, 秀英出版
- 田野村忠温 (1991) 「「も」の一用法についての覚書—「君もしつこいな」という言い方の位置付け—」『日本語学』9月号 明治書院
- 寺村 秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』, くろしお出版
- 沼田 善子 (1986) 「とりたて詞」奥津敬一郎他『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 沼田 善子・徐建敏 (1995) 「とりたて詞『も』のフォーカスとスコープ」『日本語の主題と取り立て』, くろしお出版
- 野田 尚史 (1989) 「文構成」宮地裕編『講座日本語と日本語教育1』, 明治書院
- 益岡 隆志 (1987) 『命題の文法』, くろしお出版
- —— (1991) 『モダリティの文法』, くろしお出版
- 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』, 中文館書店
- 山田 孝雄 (1936) 『日本文法学概論』, 宝文館
- 山中美恵子 (1990) 「『も』の焦点とスコープ」『STUDIAM 13』, 大阪外語大学大学院研究室
- Blakemore, D. (1992) Understanding Utterances — an introduction to Pragmatics —. (武内道子, 山崎英一 訳 (1994) 『ひとは発話をどう理解するか—関連性理論入門—』ひつじ書房)

<付記> 本稿は、1996年1月神田外語大学大学院に提出した修士論文の一部に加筆・修正したものである。指導教官として常に熱心にご指導下さった徳永美暁先生、修士論文のもととなるタームペーパーを丹念に見て下さった井上和子先生をはじめ、ご教授頂いた諸先生方に心から感謝申し上げます。